



福田恒存全集

江苏工业学院图书馆
藏书章

第五卷

福田恆存全集 第五卷

昭和六十二年十一月二十五日第一刷發行

定價五千五百圓

著者 福田 恆存

發行者 西 永 達 夫

發行所 株式會社 文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三ノ二十三
郵便番號一〇一一
電話東京 (03) 三五—三二 (大代表)

印刷所 精 興 社

製本所 加 藤 製 本
製函所 加 藤 製 函

©TSUNEARI FUKUDA 1987

萬一、落丁、亂丁の場合はお取替いたします

ISBN 4-16-363390-1

Printed in Japan

目次

I

批評家の手帖

*

翻譯論

*

漢字は必要である

國語審議會の愚民政策

言葉と文字

陪審員に訴ふ

新國語審議會採點

言葉は教師である

日本語は病んでゐないか

148 144 136 120 117 114 111 85 13

世俗化に抗す

II

文化破壊の文化政策

進歩主義の自己欺瞞

傳統にたいする心構

政治主義の悪

常識に還れ

常識に還れ・續

大衆は信じうるか

論争のすすめ

消費ブームを論ず

153

161

165

180

210

219

235

240

244

262

革命夢譚

獨學で出る大學

附合ふといふ事

自然の教育

現代の惡魔

自由と平和

道德は變らない

平和の理念

日本共産黨禮讚

III

ライシャワー攻勢といふ事

347

334

321

311

297

291

286

280

274

268

適應異常について

日本の知識階級

人間不在の歴史觀

軍の獨走について

近代化を阻むもの

演劇的文化論

IV

象徴を論ず

私の保守主義觀

現代青年氣質

五箇條の注文

443 440 437 423 . 402 393 383 376 368 358

民主主義を疑ふ

マス・コミといふ言葉

歴史教育について

暗殺の暴力と言論の暴力

言論の自由について

言葉の魔術・ブライヴァシー

言論の自由の效用

教育制度の改革を促す

物を惜しむ心

V

天邪鬼

491

484

481

479

473

464

461

458

455

448

愚者の樂園
きのふけふ

VI

シャーロック・ホームズ
鳳凰堂本尊修理に挑む

覺書 五

619

597

577 526

福田恆存全集 第五卷

裝釘 柴永文夫
題簽 田中眞洲

I

批評家の手帖

——言葉の機能に關する文學的考察

一

確かなもの一つもない。おそらくそのためであらう、人は確信をもつて語り、確信をもつて行ふ。少くともさうすることを好む。つまり、言葉をもつて、あるいは行動によつて、他人を支配しようとする。その支配の過程を通じて、未確定なものが初めて確定的になる。

二

初めから確かなものがあるのではなく、それは必ず人が欲して造りあげたものだ。だが、それを欲して造りあげようとすると人は、決してさうは言はない。それが初めから存在してゐたやうに言ふ。事實、そのやうに思つてゐる。さう思ひこまねば、何も言へぬし、何も行へぬであらう。

三

それにしても、一つとして確かなもののない現實を材料にして、確かなものを造りあげる行爲が、動機論的にも結果論的にも、他人を支配することしか意味しないといふことに、私たちはどこまで氣づいてゐるだらうか。私はそのことの善し悪しを言つてゐるのではない。なぜなら、何も語らず、何も行はずにすませることは誰にも出来ないからだ。したがつて、他人を支配することは、本質的には善悪の問題ではない。生きるといふことは支配し支配されるといふことなのだ。それでいい。ただ私たちがどこまでそのことに氣づいてゐるか、そこに問題がある。

四

そんなことは誰にしても氣づいてゐると人は言ふかもし

れない。それは百も承知のうへで、時に確信に満ちて語り、時に確信に満ちて行ふだけと言ふにちがひない。本當にさうだらうか。周圍を見まはしたところ、それにしては、あまりにユーモアが無さすぎる。あるいは苦澁が無さすぎる。

五

確かなものが一つもない世界で唯一の確かなことは、その確かなものが一つもないといふことだけだ。確かなものが一つもないといふことが確かなら、懷疑主義は成り立たぬ。確信に満ちた獨斷が、確かなものは一つもないといふ判斷の存在を知りながら知らぬふりをしてゐるのだとすれば、懷疑主義もまた、確かなものは一つもないといふことだけは確かだといふ判斷の存在に氣づかぬふりをしてゐると言はねばならない。

六

確かなものは一つもないといふこと、私はさう書いたが、この「もの」は實在を示す言葉であり、「こと」は判斷に關する言葉である。この次元の差を無視することから、あらゆる詭辯が發生する。「アキレスと龜」の話も「動かぬ矢」の話も、すべて次元の混同に基づくものである。

七

ギリシアの詭辯家たちはこの實在と判斷との次元の差を利用し、意識的にそれを混同することによつて、言葉を弄んだ。なぜそれが出來たかといへば、言葉は兩方に相渉るものだからである。それは實在を示すと同時に判斷にも關する。「山」とか「水」とか言へば、それは實在を示してゐる。「美しい」とか「嘘」とか言へば、その實在にたいする私たちの判斷を示してゐる。

八

しかし、言葉はさういふふうにつねに分擔領域が定つてゐるわけではない。その反對に、一つ言葉がつねに兩者にまたがつてゐる。すなはち「山」や「水」は私たちの判斷に關つてゐるのであり、「美しい」や「嘘」もまた實在を示してゐるのである。そのことを私たちは二千年前の詭辯家たちほどに承知してゐるだらうか。

九

言葉が實在と同時に判斷を示してゐるといふこと、言ひかへれば、判斷ぬきで純粹な實在だけを示す言葉、實在を含まずに純粹な判斷だけを示す言葉、そんなものは存在しないといふことだが、それなら、その前提として認識論的